

Decision Making



Landscape

Ecosystems

Veig

veig: SERIAL EXPERIMENTAL LANDSCAPING.
#1 THE UNDERLYNG GARDEN

veig: SERIAL EXPERIMENTAL LANDSCAPING. #1 THE UNDERLYNG GARDEN

Veig



Garden

Plant

veig #1
"THE UNDERLYING GARDEN"

WALK AROUND
THE UNDERLYING GARDEN

家を出て、南へ歩みはじめる。

落ち葉が積もる森の中。

ここは北軽井沢。

カサカサと音の鳴る斜面。

高鳴る鼓動は期待が息切れか。





最初に林檎を見つけた。
足元にはハッカがある。
森の変化に少し気づいた。
歩を進めると離れが見えた。
大正時代からあるものだ。
登り坂はもう少し。

邪魔だな。
道の真ん中に生えているのはコシアブラ。
春には天ぷらにしてみる。

坂を登り切ると目の前には庭が広がっていた。
つい1週間前までは藪。
入る事など考えてもいなかった。

私は離れに入るのをやめ、探索をはじめた。





まず目に飛び込んできたのは古い捻れた幹。
柘榴だ。
痛い。足元のカタチに気づかず踏み入ってしまった。
長い間、ひっそりとここで歳を重ねたかのような柘榴の存在感。
力強さと優しさを感じる。
奥にも何か見える。歩みを進めた。

えらく歩きづらい。
ふかふかの落ち葉から岩質に変わっていた。
ここは浅間山の麓。
岩盤があらわになっていた。

隙間に生える植物。
可愛い。
僅かな隙間に根を張り、自分の居場所を獲得していく。
足元の悪い岩場に気を取られていた。
顔をあげると小空間があった。
大きなモミジの下に4つの浅間石。
石の配置から人の存在を感じた。



平らな石に腰掛けた。
歩いてきた道を振り返り、眺める。
柵の奥には谷川ハウス。
特徴的な屋根は木々の隙間からでも異彩を放つ。

おっと。
草を踏んでしまった。
石の周りにも様々な草が生えていた。
フキ、ウルイ、コケモモ、コゴミ。
どれも食べられる。



視線を左に送ると水が溜まっていた。
湿地だ。
落ち葉が堆積し分解されたのだろう
赤茶色の土は弾力があり、滑りやすい。
朽木が横たわって生まれた土溜まりに植物が生えていた。
生命の連関を感じた。
そろそろ歩き疲れた事だし離れに向かおう。
さっきは見えなかった植物たちが見えてきた。
どれも興味深く、美しいと思った。
あ、キイチゴの実があった。ラッキー。





この離れには片側収納のピクチャーウィンドウがある。
どのような景色が写っているのだろうか。

窓の外には楽園があった。

木々が織りなす爽やかな緑と心地良い奥行き。
樹種からは花盛りの春と秋の実りを想像した。

私が離れの裏だと思っていたこの空間が庭に変わり、表となった。

私はこの庭を「表裏の庭」と名付けた。

LOGS FOR 16-19 MAY 2022
IN KITAKARUIZAWA























SPACE
SUN
air
FLOWER
Grand
bone























About veig

veig: 探索性と鑑賞性の両立を試み関係性を作り出す
ゆるやかに形を変える生態系構築ユニット

Veig is an ecosystem-building unit that changes
itself. We attempt to combine exploratory
aspects and appreciative qualities and evoke
relationships with almost anything.

Veig

我々が環境と簡単に口に出す言葉の中には、数多い数の因子が含まれている。また同じように、人間ひとりひとりの中にも数えきれないミームがあり、さらに日々移ろい変化していく。どんなに確かで変わりのないよう見えたととしても、それは人の時間軸の中でごく限られた間を切り取った部分の、あるいは目に見える部分の印象に過ぎない。

表裏の庭は、鑑賞するだけのものではなく、また決まった形に落ち着くものでもないという。森との境目は曖昧で、森の中にふわっと、違う種から成り立つひとつの領域がセッティングされたようにも見える。

北軽井沢の森の中、なぜこのような場所が立ち現れたのか?そこには veig という新しいミームの運動があり、veig というミームもまた、個々人のミームへと分解できる。
片野氏が木を一本一本見つめる眼差し、西尾氏が植える木の枝の向き

Veig, garden and memes

を決める心、履いている靴、交わす言葉のひとつひとつには、彼ら自身の原体験、焼きついた景色、聴いた音楽の一節、心通わせた誰かの言葉がどこかに息づいている。そんなミームの集合に導かれ彼らもまた、新たに veig というミームを発信し始める。

2 人による移ろう不定形の活動 /veig はさまざまな人の手を借りて、北軽井沢の森という環境の中に、自身のミームを複製したのだ。そして在来のあるゆるミームと競い、混じり、干渉しあう事で、環境は移ろっていく。変化は結果であり、善悪で判断されることはない。干渉し、その変化を見つめる透明な眼差しこそが、veig というミームの本質なのではないかと、北軽井沢の庭を歩き、続いていく森を眺めているうちにふと感じた。

Desidner: Itsuki Nomura

KOSUKE katano

YOSUKE nishio

Veig

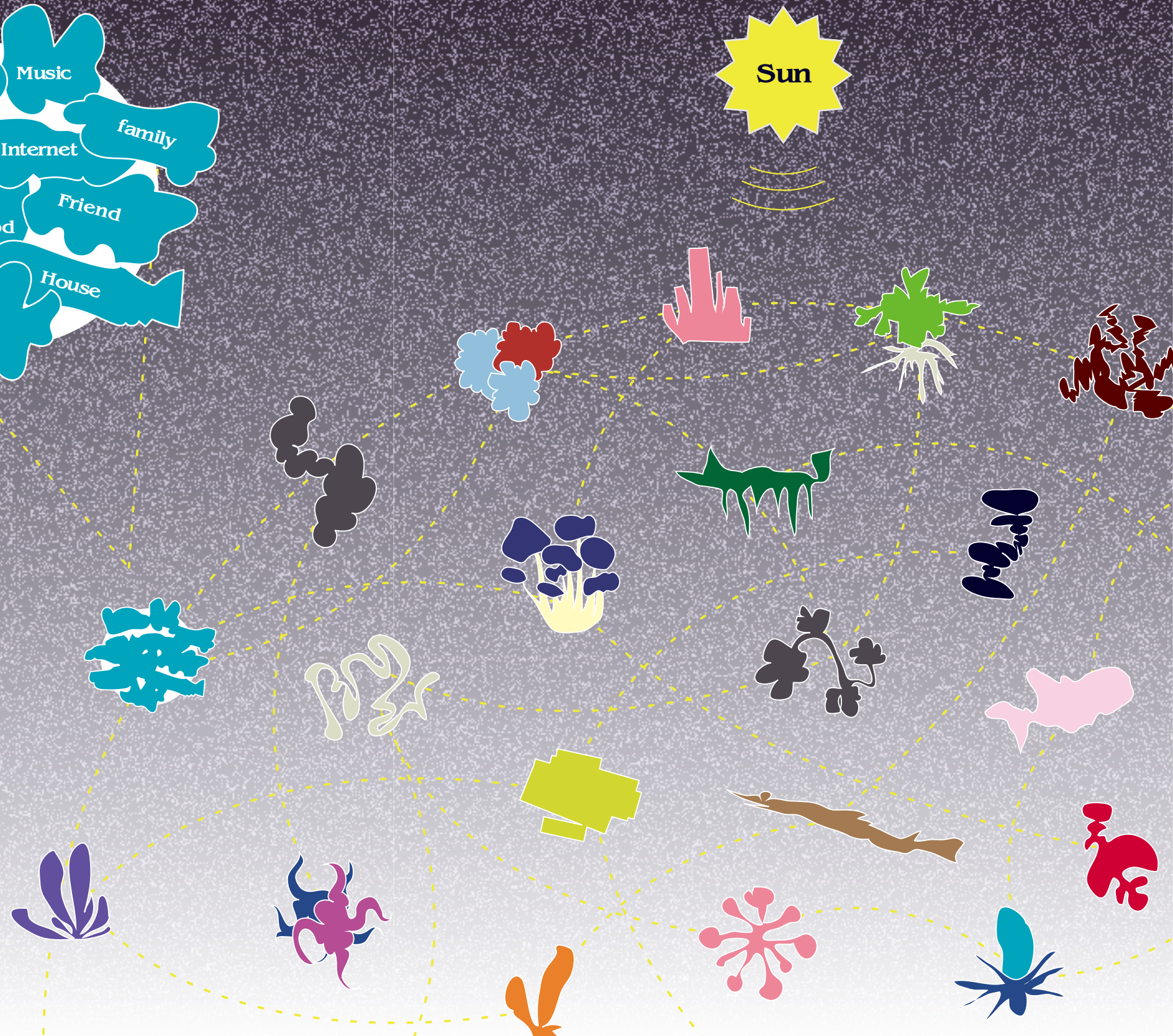
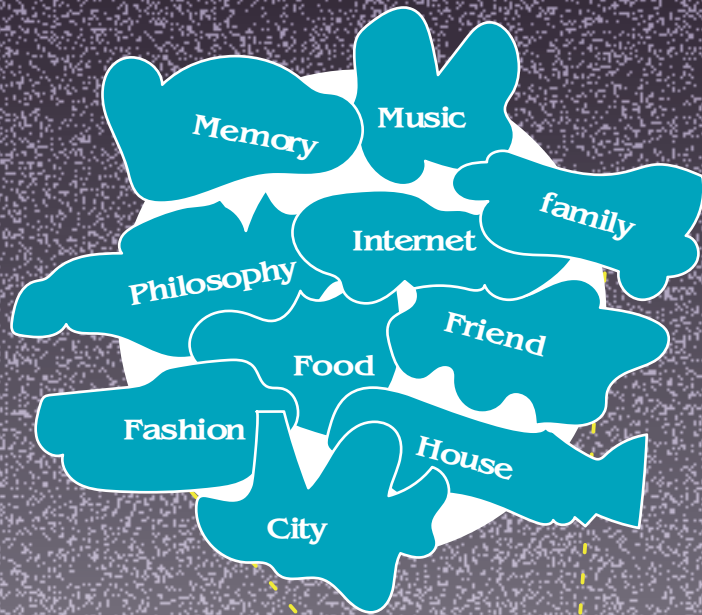


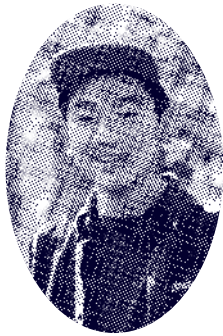
ve i bn

KOSUKE katano

YOSUKE nishio







KOSUKE katano

本プロジェクトは、私にとってのマイルストーンの一つになった。これまででは、分子の世界や市民科学などで扱われる人々の表現と継承などを例に考え、顕微鏡で捉えた写像や文章などを通じて自分なりに表現を試みていたが、同時に表現手法ごとの制約も感じていた。その過程、様々な人と交流する節々で。フィールドワークのようにある共通の現象を介し同期的に鑑賞と表現を行うことに可能性を感じ始めていた。

そもそも私は、世界観を他者と互いに伝達し、共通言語を見出すことに喜びを感じる。生き物がその生涯で後世に自らを継承する様、その手段が多様であることに面白さを感じるワケである。こうした動機をきっかけに、如何に人々と共感するきっかけを作り出すかと考え、その過程で「空間」と「生態系」の二つは全生物が生まれながらに共有する非常に便利な「言語」なのではないかと考えるに至った。この暫定的な考えを実践を通してその納得感を検証するには、実際の空間的な表現である造園やランドスケープが適しているのではないかと、その考えや思いを知人に話して回っていた 2021 年の秋頃、本ユニット”Veig”を結成する機会が訪れた。

当時、西尾さんとは世に溢れる極端な環境プロジェクトや反省や学びの機会を損失している事例から、物事に対する謙虚さや納得感、鑑賞と表現の大衆化、collective of indivisuals などについて議論を重ねていた。そんな年末期に、渡米以前から Biohack Academy や Fablab 鎌倉などで共に過ごした内藤海くんから連絡を貰い、黒川彰さんが幹事を務めるイベントで登壇することになった。このイベントに偶然参加していたのが遠山正道氏である。イベント後も話が盛り上がり、食事をしながら北軽井沢の別荘に来て庭（というより周囲の生態系）を見に誘われた。余談だが、この日食事をしたお店は私が大好きな Ghee 系カレー (Hatos Outside) の系譜上である FORRESTER であったこともあり話に花が咲いた。

後日、北軽井沢の別荘を訪れた。この際、偶然ダブルブッキングしていた友記こたおさん親子とのヒップホップを中心とする音楽談義も思い出深い。過去に軽井沢周辺の土地のリサーチをしていたこともあり、軽めの

フィールドワークを済ませ、周囲の生態系や土地の歴史を考察しつつ、遷移の初期段階である山地でホモ・サビエンス、そして文化人としての遠山氏が時を過ごす姿に思いを馳せた。直前にその家が谷川俊太郎氏が篠原一男氏に詩を託して作ったという別荘であることを知るが、畑違い故まずは我々の主観のみで仮説を立てることにした。遠山氏と世界観に関する共通点を探る会話をすると、以前友人であり敬愛する大野友資さんとコンセプトの原義について対話したことを思い出していた。”concept” は”con-cept” という 2 つの語により構成されており、それはすなわち共に獲得した世界観であるという話だ。そうして言語化をしたコンセプトを空間的な表現に落とし込めたのは、ほかでもない本プロジェクトに関わったすべての人々のおかげである。こうしたプロセスを zine という体裁で記録しようという試みも、青春時代大好きだった編集スタイルの POPEYE カラーページを担当していた友人の野村一樹くん相談したことで実現に至った。

クレジットに記載されている人物全員が輝いた、非常に気持ちの良いプロジェクトであると共に、これからの Veig としての活動の可能性を感じさせる学び多い原点となったのではないかとと思う。

中学時代、母親の乳がんがきっかけで分子生物学に関心を持ち、エビジェネティクスなどを独学で学び、高校時代には企業や大学のラボを利用し個人で研究。高校卒業後、MIT Media Lab 研究員に。同研究所の Synthetic Neurobiology Group で組織内ゲノムシーケンス手法開発に携わり Community Biotechnology Group では低コストかつ世界中どこでも自作し使用可能な実験機器、手法の開発や、生物学研究の民主化の研究を行う。2019 年帰国後、Sony CSL の Synecoculture グループ、一般社団法人シネコカルチャーにて拡張生態系の研究に携わる。現在は個人事業主として「生命の連鎖を起こす」という理念を軸に研究、企業への研究 / 事業アドバイスや空間設計など分野問わず活動している。



YOSUKE nishio

依頼して下さった施主の遠山さん。彼は離れにウッドデッキを作り、山の眺めを楽しみにしていました。

そんな中、私たちに離れ周辺の環境、庭づくりの相談をして下さりました。

はじめてのフィールドワークは 2022 年 1 月初旬。雪の中、谷川ハウスと離れ周辺や村を歩きながらこの地の植生や周辺環境を見て回りました。その晩、薪ストーブの温もりを感じながら遠山氏の好みや庭への気持ちを聞き、私たちの庭のイメージやフィールドワークで感じた事をお話ししました。

その後、改めて庭づくりのお願いをいただきました。

生態系を重視し、空間での探索性を求める我々の空間イメージ。それをどのように表現し、愉しむのか。Veig の設計活動が始まりました。

二子玉川公園の階段に座り、多摩川を眺めながらラフに意見を出し始めました。そのとき片野が言った納品物は空間だけではなくホモ・サビエンスとして力をつけた遠山さん自身もだと。いま思うとこの一言で方向性が何となく決まったのかなと思っています。

生態系を構成する 1 要素としてのホモ・サビエンス。鹿や猪、兎など変わらない。ただ発展の著しい一種として捉える。触る・嗅ぐ・見る・食べる・聞く・感じると言ったシンプルな自然との関わり方を引き出すような空間像が浮かびました。

それに伴い、離れ周辺と漠然と決められていた対象地もホモ・サビエンスが住み着くであろう離れの裏にある平らに近い緩斜面地に決まった。

それからはそのホモ・サビエンスがどうすれば自然と関わり、学ぶ事ができるかを考えました。食べて美味しいといったエディブルガーデンのような人間勝手心地良さだけではなく、探索性を高める為に料理をしたり方法を探さないと食べられない種の選定やトゲのあるもの、下枝のないものを混ぜて配置し、採取の難易度を上げました。

その他にも綺麗な水を好むヤマワサビを自生種のフキと混植し、地下を流れる水の鮮度の指標として扱ったり地面の一部を浅間石に変え、

あえて足元を悪くする事により視線を下に誘導しました。

地面でもう 1 つ。赤土を持ち込み、すり鉢状に踏み固めてわざと水捌けの悪い場所を作りました。そこは雨が降ると数日間雨水が溜まり半湿地となります。保水力を持った新たな環境にどのような生態系が広がるか楽しみです。

まだまだ伝えたい事が多くありますがこの辺で。

今回、造園家として 1 番苦労したのはこの複雑に絡み合う要素や多様な樹種を景色として美しく表現する事でした。自然界の中ではありえない樹種の組み合わせやホモ・サビエンスの気配。それらを自分の中にあるデザイン手法を用いて窓からの眺めを 1 枚の絵にし、遠山氏へ贈らせていただきました。

竣工後に遠山氏に名付けていただいた「表裏の庭」「離れの裏と思っていた空間が表になった」と言ってもらい、非常に嬉しく感じております。

2016-2020 東京農業大学造園科学科にて造園学を学び古庭園の調査や保存に関わる。卒業設計では牧場の観光地化を課題とする広域のランドスケープ計画を行い、日本デザイン学会の卒業制作特集に選出される。大学で学術的に造園学を学ぶ傍ら、日本で活躍する有名造園家のもとで庭について学ぶ。2020- 大学卒業後、アメリカのポートランドにある造園会社と契約。コロナウイルスの感染拡大のため契約が白紙になり、実家である株式会社越路ガーデンに所属し東京を拠点に東京事務所として活動する。住宅、商業施設問わず様々なフィールドで空間の設計・施工・監修を行う。

- Project -

Veig #1 Surrounding ecosystem, Tanikawa house

- Team -

Concept

Kosuke Katano

Yosuke Nishio

Direction & Design

Yosuke Nishio

Construction

Masato Kawai

Seiya Kawahara

Ryoji Nagasawa

Art direction & photo shooting (Zine)

Itsuki Nomura(marici)

Hiroki Tagawa

- Special thanks -

Masamichi Toyama